

日蓮大聖人御書全集

ほっけししょうみょうしょう

法華証明抄

新版
1930
ゝ
1931

ほつけしようみようしよう

法華証明抄

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

なんじようときみつ

弘安5年('82)

2月28日

61歳

南条時光

ほけきよう

ぎようじゃにちれん

かおう

法華經の行者日蓮 花押

まつだいあくせ

ほけきよう

きよう

しん

そうろうもの

末代悪世に法華經を経のごとく信じまいらせ候者を

ほけきよう

おんかがみ

浮

たも

はいけん

ば、法華經の御鏡にはいかながうかべさせ給うと拝見つか

そうら

かこ

じゅうまんおく

ほとけ

くよう

ひと

まつり候えば、過去に十萬億の仏を供養せる人なりと、

しやかぶつ

こんく

おんくち

い

たま

そうろう

たしかに釈迦仏の金口の御口より出でさせ給いて候を、

いちぶつ

まつだい

ぼんぷ

疑

一仏なれば末代の凡夫はうたがいやせんずらんとて、ここ

とうほう

遙

くに

過

たま

ほうじよう

より東方にはるかかの国をすぎさせ給いておわします宝浄

せかい たほうぶつ

ぎょうこう

たま

しゃかぶつ

世界の多宝仏、わざわざと行幸ならせ給いて、釈迦仏にお

む

みようほけきよう

みな

しんじつ

り向かいまいらせて、「妙法華経は、皆これ真実なり」と

しようみよう

たま そちら

うえ

何

ふしん

のこ

証明せさせ給い候いき。この上はなにの不審が残るべき

まつだい

ぼんぷ

覚

束

思

なれども、なおなお末代の凡夫はおぼつかなしとおぼしめ

じつぼう

しよぶつ

め

集

たま

こうちよう

しやありけん、十方の諸仏を召しあつめさせ給いて、広長

ぜつそう

もう

むりようこう

なが

虚

言

広

舌相と申して、無量劫よりこのかた永くそらごとなきひろ

長

おお

おんした

しゆみせん

こくう

た

並

くながく大いなる御舌を、須弥山のごとく虚空に立てなら

たま

夥

そちら

べ給いしことは、おびただしかりしことなり。こう候えば、

まつだい

ぼんぷ

み

ほけきよう

いちじにじ

しん

末代の凡夫の身として、法華経の一字二字を信じまいらせ

そうら

じつぼう

ほとけ

おんした

たも

候えは、十方の仏の御舌を持つものぞかし。

かこ

しゆくじゆう

み

う

いかなる過去の宿習にてかかる身とは生まるらんと

よろこ

そうろううえ

きようもん

かこ

じゆうまんおく

ほとけ

遇

悦びまいらせ候上、経文は、過去に十万億の仏にあい

くよう

そうら

もの

ほけきよう

まいらせて供養をなしまいらせて候いける者が、法華経ば

もち

そうら

ほとけ

供養

くどく

かりをば用いまいらせず候いけれども、仏くようの功德

ばくだい

ほうぼう

つみ

ひんせん

み

う

莫大なりければ、謗法の罪によつて貧賤の身とは生まれて

そうら

きよう

しん

ひと

み

そうろう

候えども、またこの経を信ずる人となれりと見えて候。

てんだい

おんしやく

い

ひと

ち

たお

かえ

ち

これをば、天台の御釈に云わく「人の地に倒れて、還つて地

お

とううんぬん

ち

倒

ひと

より起くるがごとし」等云々。地にたおれたる人は、かえり

ち 起 ほけきようほうぼう ひと さんあく にんてん ち
て地よりおく。法華經謗法の人は、三悪ならびに人天の地に

倒 そうら

ほけきよう みて

ほとけ

はたおれ候えども、かえりて法華經の御手にかかりて仏

成 判

そうろう

になるとことわられて候。

うえののしちろうじろう

まつだい

ぼんぷ

ぶし

いえ

しかるに、この上野七郎次郎は、末代の凡夫、武士の家に

う あくにん もう

こころ

ぜんにん

ゆえ

生まれて悪人とは申すべけれども、心は善人なり。その故

にちれん ほうもん

かみいちにん

しもばんみん

しん

たま

うえ

は、日蓮が法門をば上一人より下万民まで信じ給わざる上、

しん

ひと

しよりよう

でんぱたとう

たまたま信ずる人あれば、あるいは所領、あるいは田畠等

煩

けつく

いのち

およ

ひとびと

しん

にわずらいをなし、結句は命に及ぶ人々もあり、信じがた

うえ

母

こうえのしん

そうら

き上、はは・故上野信じまいらせ候いぬ。

ものちやくし

ひと

勧

しんちゆう

しん

またこの者嫡子となりて、人もすすめぬに心中より信じ

じようげばんにん

諫

脅

まいらせて、上下万人にあるいはいさめ、あるいはおどし

そつら

す

こころ

そつら

ほとけ

候いつるに、ついに捨つる心なくて候えば、すでに仏に

成

み

そつら

てんま

げどう

やまい

付

脅

なるべしと見え候えば、天魔・外道が病をつけておどさん

こころ

そつら

いのち

限

驚

と心み候か。命はかぎりあることなり。すこしもおどろ

くことなかれ。

きじん 奴

ひと

悩

つるぎ

逆

呑

また鬼神めらめ、この人をなやますは、剣をさかさまにの

たいか

抱

さんぜじつぼう

ほとけ

だいおんてき

むか、また大火をいだくか、三世十方の仏の大怨敵となる

ひと

病

か。あなかしこ、あなかしこ。この人のやまいをたちまちに

治

守

きどう

だいく

抜

なおして、かえりてまぼりとなりて、鬼道の大苦をぬくべき

ぎ

げんざい

こうべしちぶん

わ

とが

おこな

か。その義なくして、現在には「頭七分に破る」の科に行

ごしよう

だいむけんじごく

お

なが

なが

われ、後生には大無間地獄に墮つべきか。永くとどめよ、永

止

にちれん

ことば

卑

こうかい

こうかい

くとどめよ。日蓮が言をいやしみて、後悔あるべし、後悔

あるべし。

こうあんごねんにがつにじゅうはちにち

弘安五年二月二十八日

ほうきぼう くだ

伯耆房に下す。